

健康文化

蝉の声

高田 健三

お盆を過ぎたと思ったら、ツクツクボウシの声を聞いた。わたしの家の近辺では今年の初鳴きである。毎年のことではあるが、ツクツクボウシの声で秋はもうすぐそこだということを知らされる。元来、日本人は虫の声、風の音、鳥の鳴き声や雨の音など、自然の音に独特の感性を持っている民族である。初夏の蝉の声は、さあ夏ですよと暑さの到来を告げる合図でもある。ニイニイ蝉にはじまって、クマ蝉、アブラ蝉、ツクツクボウシと鳴き声に移り変わって行くことで、我われ日本人は夏という季節の変化を感じとっているらしい。

ある夏のことである。アメリカ人の友人を鳥羽湾にある名古屋大学菅島臨海実験所に案内する途中、外国からの来訪者にはおきまりのコースになっているミキモト真珠島に立ち寄った。今は橋がかかっているが、当時は「渡し」で島と行き帰っていた。島の栈橋に降り立つと、突然のようにアブラ蝉の蝉しぐれに遭遇した。アメリカ人の彼女はそれを聞いてかなり驚いたようで、あれは何の「音」だと云う。蝉の声だと説明すると、また驚いたようで、顔をしかめて、あれを一日中間かされるこの辺の人達はさぞ大変だろうと同情の様子であった。彼女のこの現実的な言葉に、今度はこちらが不意打ちを喰らった感じがした。いわれて見れば確かにうるさい音ではあるが、我われにとってそれは夏の音なのである。聞こえていても聞いていないも同然の、夏の環境音とでも云うべきものだろうか。カリフォルニア大学（バークレイ）にいた2年半ほどの間、いわれて見ると蝉の声を聞いたことがなかったように覚えている。その当時、彼女は隣の研究室でドクター論文をまとめる研究に没頭している大学院生であった。どこの州の生まれかは知らないが、蝉の声には馴染みがないようであった。だから騒ごうしい音に聞こえるのかと思った。それに反し、我われ日本人は子供の頃、夏ともなると蝉とりに熱中したものである。今でもわが家の近所では、兄弟か友達とつれだって、中には女の子も交えて蝉とりをする姿を見かけるが、特に翅が透けたクマ蝉やツクツクボウシをとったときの興奮は、今だに体が覚えている。

秋ともなると、歳時記を賑わすスズ虫やカンタンなどの虫の声に耳を傾け、

夜長の一時を楽しむのは今も変わらない。ところがである。西欧人にとって虫の声はうるさい音にしか聞こえないということが、日本と西欧の文化の違いをテーマにした英語のテキストに書かれていた。私の勉強不足でよく知らなかったが、後になって、それには科学的根拠のあることを知った。それというのはある日本の大脳生理学者の研究によるもので、日本人は虫の声を大脳の左半球で聞き分けるが、西欧人は右半球で聞き分けるという大脳生理学上の違いに起因するということであった。秋の虫の声に心がなごむか気持ちがいら立つかが、脳の機能のちがいによるとすると、文化人類学や比較文化論も大脳生理学を抜きにしては論じられないのではと想着いたら、最近になって、この学説にはいろいろな問題があって、定説としてはまだ確立されていないことを知った。そこで少しくホッとしたというのも、情緒などという人類特有（と私は勝手に思っているが、もしかするとそれは人間の驕りかもしれない）の心の世界が、日本人と西欧人との脳機能のちがいによって異なるとは考えたくないからである。脳と心についての研究が、最近さかんに行われるようになった。喜怒哀楽がどのようにして起きるかも、かなりわかって来たという。情緒は科学の世界に馴染まないが、科学は情緒の世界に迫ろうとしている。禅や茶の湯の「心」が、これこれの脳の働きですと解き明かされる時代が来たら、精神文化とは何かをもう一度問い直さねばならないだろう。21世紀は、今世紀における科学技術の行き過ぎのため失われた精神文化を取り戻す時代にしなければならないと、多くの識者が指摘している。しかし、現実はその方向に向かっていくようには見えない。一番の問題は、自然科学者と人文科学者との間に共通の言葉が欠けていることにあると私には思えて仕方がない。

もし現実に虫の声に対する反応にちがいがあるとすると、脳の機能でなければそれが何に起因するのであろうか。話は少しそれるが、中世中頃までは、科学技術の面で東洋（中国）が圧倒的に優位であったのが、その後は西欧の進歩が著しく、東洋は現代型（ヨーロッパ型）の科学技術から取り残されてしまったという経緯がある。物の本によると、その原因はキリスト教文化と仏教文化とのちがいであるとする科学史上の一つの見方があるという。西欧では、自然は人間にとって常に対立する苛酷なものであり、人はこれに打ち勝つための闘いを強いられつづけて来た。一方、東洋では人は自然に対し、自らを同化させるとともに、また、畏敬の念を抱いてきたという歴史がある。この結果が自然現象に対し客観的（解析的）であるか、感覺的（情緒的）であるかという観念を生み、それぞれの型の文化を形造って来たというのである。どうやら虫の声に対する感受性のちがいは、現代人（ホモ・サピエンス）誕生以来2万年の間

の脳機能分化のちがいに求めるより、中世以降、宗教を背景にした生活の中で、自然との関わり方を異にしたことによると考えた方がよさそうである。かつてアメリカ人の彼女が蝉の声に驚いたのもそうなんだろうと私なりに何となく理解できた。

ところで、私が今在職している大学に、教官の自己紹介をする学生向けパンフがある。専門、趣味、モットー、好きな作家などいろいろな項目に分けられている。趣味の欄に「限りなくモーツァルトが好きだ」と書いたところ、学生からではなく同僚の先生方から反応があって、コーヒープレイクの時などに音楽談義をすることがある。「モーツァルトは何ととってもいいですね」とか、「モーツァルトのどこが好きですか」などなどである。わたしみたいな「音楽愛好家」の端くれにも入らないただの音楽好きには、曲の構成とか、重厚さとか、軽快さなどは問題ではなく、さあ「聴こう」と構えて聴く曲よりも、いつでも安らぎをもって「聴ける」曲が性に合っている。ずっと昔、理学部生物学教室に、動物や植物のスケッチをするれっきとした絵描きさんがいた。当時、院展や二科展など、絵画展にはよく通った方であったが、「何何賞」などトリボンのついた絵のよさがわからないことがしばしばあった。ある時、その絵描きさんに、絵の鑑賞の仕方をたずねたところ、「見て美しいなと感ずれば、それが絵なんです」という答えが返ってきた。それ以来今日まで、彼の言葉の通りに絵を楽しんでいるが、モーツァルトの曲は私にとってそういうものということになるだろうか。

私もその一人であるように、世の中にはモーツァルトの音楽を素晴らしいと思う人がずい分多い。私が好きだという理由は上に述べた通り、極めて平凡なものでしかない。ところが、なぜ多くの人がそう思うかを研究している科学者がいる。その人、武者教授（東京工大）によれば、演奏されるモーツァルトの音楽の振動数（周波数： f ）を詳細に分析して見ると、「 $1/f$ ゆらぎ」というある種のゆらぎ現象が存在しているという。いろいろ調べた結果、ベートーベンなどクラシック音楽に限らず、典型的な艶歌である古賀政男の曲など、ほとんどの曲が同じゆらぎを持っていることが判った。さらに驚くべきことには、それが人間の心臓の心拍間隔のゆらぎと非常によく一致することである。つまり我われが聴いている音楽が音楽であるための共通の性質は、「人間の生理的リズム」の示すゆらぎを反映したものであるという。だからこそ音楽というものは、民族、文化、宗教のちがい、さらにははるか歴史の隔たりさえも越えて世界中の人びとの心を打つわけである。まちがって理解しているかも知れないがこの研究に私自身、大いに納得させられるものがあつた。デキシー、ウェスタ

ン、カンツォーネ、フォルクローレ、シャンソン等は、世界各地の生活に根ざしたローカル色の強いものであるが、世界中に広まって他国民にも愛されるのも同じ理由からであろう。日本人に好まれるというドップラーの「ハンガリー田園幻想曲」の旋律が、東北地方に伝わる民謡の節まわしに似ているというのは偶然にしてまた当然に思える。世の中には「クラシック」しか聴かない、カンツォーネや艶歌は嫌いだという人がいるが、自分でそう思い込んでいるだけなのかも知れない。ロングフェローは、「音楽は人類の持つ普遍的な言葉である」といったという。この詩人は音楽にかくされている科学的普遍性を鋭い感性でとらえていたのである。人類は既に石器時代、リズムをつくるのに石、木片、骨などをたたいていたらしいというが、恐らく体でリズムをとっていたのであろう。ところでスズ虫やカネタタキの声は勿論のこと、蟬の声もリズムカルである。ことにツクツクボウシとなると、なかなかの手の込んだ(?)節まわしで、恐らく、昆虫界にあっては最高のテクニシャンではなからうか。虫の声にはあのゆらぎ現象はないのであろうか。もしあるとすれば、西欧の人達も、虫の声を楽しめるはずなのだがと思う。

左脳で聴くか右脳で聴くか、あるいは文化形成の歴史のちがいによるかはともかくとして、音楽の他に虫の声や雨の音など自然の音も生活の中に取り入れて楽しめる日本人は、恵まれた感性を持った民族であると感謝すべきである。いわゆるポピュラー音楽には特にシーズンはないが、クラシックには秋というシーズンが相応しい。なぜか、クラシックには聴くための条件があるらしい。それはまた別の生理的リズムなのだろうか。今年もまた、世界中のコンサートホールで、モーツァルト、シベリウス、マーラーなどなどが演奏され、多くの聴衆を魅了するであろう。アインシュタインはかつて、あなたにとって死とは何ですかと問われたとき、「それはモーツァルトが聴けなくなることです」と答えたという。あの偉大な理論物理学者もまた、モーツァルトをこよなく愛した一人であったと思うと、ぐっと親しみが湧いて来る。もし天国にいるアインシュタインに、蟬の声やスズ虫の声はどのように聞こえるか、たずねてみたらどんな返事が返ってくるだろうか。

(同朋大学教授・名古屋大学名誉教授)